

お盆について思うこと

下谷 尾崎 三枝子

「ふる里は遠きにありて思うもの」
核家族制度になった今日、此の心境の
味わいを年と共に深く感ずる人が多い
と思われます。

ふる里は先祖の眠る墳墓の地であり、
幼ない時遊んだ思い出の山や川、親兄
弟、血縁友達のふれあいがあるからで
あります。お盆が近くなると日本列島
の大移動が始まり、帰省ラッシュが大
変になります。それにも察りず心はふ
る里へとはずんで居られると思いま
す。言う迄もなくお盆の核心は墓参で、
先祖の前に感謝し、その培って来られ
た伝統を思い、これを継承し、更に後
世へ伝えて行かねばならない使命を持
っている自分を自覚する機会でもある
と思います。

日頃先祖とか仏壇に無縁な子供も、

仏壇の前に合掌し、先祖の話聞くこ
とに依って、理屈でなしに生きた人間
教育の場ともなると思います。

盆踊りは先祖の魂を迎えその霊を慰
める為に行われるもので、新盆には特
に親類縁者が集まって踊ったものだ
と聞いていますが、高令化と共に低調に
なり考えさせられます。

お盆を契機に先祖を敬い、帰郷の人
との心の交流、自然のふれ合いを大切
にし、祖先の残された文化を受け継ぎ
伝えて行かねばならない事を痛感する
ものであります。

終戦記念日に思う



飯谷平 武田 勇

昭和二十年八月十五日、私は中支、
湖南省のある山腹で、ざん據堀りをし
ていた。近々のうちに予想される、強
大な戦力を誇る中国正規軍の反攻をく
い止めるべく準備を整えていたのであ
る。忘れもしない、其の日は朝から快
晴で一点の雲もなく、真夏の太陽が広
い大陸一ぱいにじりじりと照りつけて
いた。流れる汗をぬぐいながら振るう

スコップも重く、仲々仕事もはかどら
ない。ところが不思議なことに、今ま
で大空を我が物顔に足茂く大挙して飛
来していた敵機が見えない。今日はた
ゞ一機、低速で恰も遊覧飛行のような
姿で、広い大空を悠然と旋回している。
私はなにか昔の平和がよみがえったか
のような錯覚さえ覚えたのである。

一日の作業を終え宿舎に帰ったとき、
我々は驚くべき衝撃的なニュースを知
ることになった。大隊本部の通信兵が
終戦の玉音放送を傍受したというので
ある。こゝで我々は、はじめて祖国の
悲しい運命を悟った。これは単なる終
戦ではなく、明らかに敗戦による終戦
ではないか。何ということだ。我々は
この時、全身の力が一時にぬけてしま
ったかのようにさえ思えた。後日譚で
はあるが今少し終戦が遅ければ、我々
はあの抵抗線を支えきれず、中国軍に
よりおそらく全員玉砕していただろう
ということを知った。正に冷汗三斗の
思いであった。

あの時からはや四十余年の年月が流
れ、其の間に我が国は飛躍的な発展を
遂げ、世界有数の経済大国といわれる

までになつた。終戦時の混乱期を思えば誠に感慨深いものを覚える。また戦争の悲惨さを身をもって体験した私は、この不幸な戦争を二度と繰り返してはならず、今よくいわれる軍事大国などには決してなつてはならないと思う。今の世の平和の有難さをかみしめながら、高令者なりに少しでも社会に役立つ生き方がしたいものだと思ふ昨今である。



温情

八反田 花田 幹子

終戦—昭和二十一年十月末日帰国その前にも後にもない様々な体験を致しました。今、浮上して来るのは此の間に、新義州で受けた忘れぬ温情です。朝鮮の将校崔さんは、敗戦の私達の慰めにギターを弾きながら歌を教えて下さいました。その歌詩とメロディが、崔さんのおかあさん、奥さんの優しい笑顔と共にはつきりと甦ってきます。

高粱酒会社の重役・華僑の呂さん御夫婦、家事手伝いの私に「花田の主人や両親が、今の姿を見たら泣くだらう」

と日に二度の食習慣を三度に切り替え、月見、重陽の節句と素晴らしい行事食を楽しませて下さいました。大きな動物の形をしたマンジュウ、山盛りのギョウザ、鯛の丸煮あんかけ等々、食べ切れなかつたご馳走と、器用な手先と奥さんの大きな目が鮮明です。

二十一年十月上旬、帰国の前夜、呂さんにお別れに行つての帰り道、ソ聯将校と朝鮮の人とのはさみ打ちになりました。切羽詰まつた瞬間でした。「ヤホンスキーマダム、カチャカチャー」と大きな声—その将校の奥さんが彼を引っ張り込んで下さったのです。今更の様にその偶然を感謝し、目に見えない大きな力と夜目に顔も分らなかつたマダムに手を合せます。お蔭で帰国以来、ちょうど四十年間主人との家庭生活、社会生活を過ごさせていたよく事が出来たのでございます。

寿会会長就任に当り

—人生夢をもって—

下市 渡 寛 之

「人生七〇年古稀なり」中国の杜甫の詩にそうあるところから七〇才にな

ると長寿を祝う習わしが生れたそうですが、その詩は千年以上も前に書かれたものであります。

かえりみますとひたすら馬令を重ねただけの七十二才に恥じ入るばかりであります。今度去る六月の総会に於て不肖私が前会長尾崎氏の後任として寿会のお世話をせよとの事でお引受け致した様な次第ですが、当大代町も全国的な農村地の過疎にない大田市合併当時は人口式千人余りありましたが、現在は半数以下で六十才以上の老人と言う人々が、大代町全人口の三八%と言う高率にして、これでは町の原動力で有りました方々が高年令になつておられるのが良く分りました。この方々は現在でも各家庭に於かれて今だに第一線に立って働いて居られるのが大部分です。

先般六月廿五日当町で市政懇談会の折、石田市長に当大代町へ憩の老人ホームを建てて頂き度いと申込んで置きました。これからは寿会会員の皆様と色々な方面の修養に趣味に、又レクリエーションに集合して頂き老後の夢は山ほど有ります。人生いくつになリ

しても夢、夢、これこそ生きがいだと思えます。

どうか寿会の色々な行事には沢山の会員の皆様方が御出席下さって楽しいひと時を過ごそうでは有りませんか。今後共よろしく私どもを叱正御指導下さる様お願い致します。

ふるさと大代 —南の空を埋める山々は—

若葉の香り一ぱいの緑の中で、鮮やかな鯉のぼりが泳いでいた五月五日の子供の日、幼稚園や小学校の子供と一緒に、下谷く右原く三谷の木村牧場を見学しました。

大代町の三瓶高原を、ほうふつさせる様な広大な草原の中で十数頭の乳牛が放牧されていました。

何気なく撮った写真の中に、大代町の南の空に浮かぶ中国山脈の雄姿があり、改めて感動させられました。

冠山、京太郎山を始め右に浅利富士(？)、山据には丸山城跡など、郷土の高山をはるかに凌ぐ一〇〇〇米級の山々が遠く近くそびえていました。

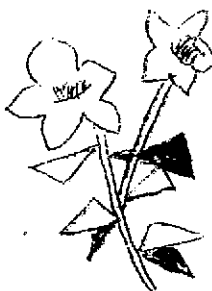
早速、地図を引用したり、社会科の先生にも尋ねたりして見ましたが、その存在がはつきり致しません。

郷土史の館報を印刷致しまして、その上部に描いて見ました。

朝に夕に毎日の様にお目にかゝる山々、皆さんご存知でしたら教えて下さい。子供達もきつと喜んで語り継いで呉れる事と存じます。

近く発行予定(公民館 主事)

短歌



一女

虫すだく 秋の野道を我行けば

虫の音 たえて 露は光つ

真夏日の 水やりもせぬ朝顔に

主わすれ得ずか 花開きおり

念願の 屋根ふき終えて うら盆の

心はればれ 仏 迎える

あらかじめ 知るよしもなく

終り日を

春たつころの うらら日のころ

おしらせ

赤ちゃん誕生

おめでとうございます

柿田 谷 口 喜義 一かずま

真理子 真くん

大代町 敬老会

日時 九月十三日(日曜日)

午前九時三十分から

場所 大代中学校屋体

元気でご出席をお待ち致します。

